

おいてけ堀ぼり



登場人物

ナレーター

留吉とめきち

母はは

川かわの主ぬし

村人むらびと 1

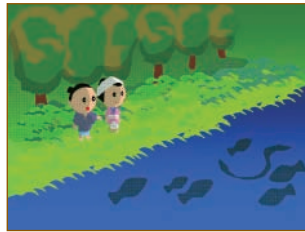
村人むらびと 2

村人むらびと 3

村人むらびと 4



1



2



3



4



5



6



7



8



むかし、早川村の北の方に、たいそう魚さかなが釣つれる小川がありました。

小園こぞねの村から流れ出した水がだんだん川となり、村の真ん中を流れる目久尻川めくじりがわに流れこんでいました。その川下かわしもより少し上流に行つたところは、四方しほうが山に囲かこまれた田んぼで、その中を小川が流れていました。

土手どてには草や木がいつぱい生おい茂しげり、昼間でも薄暗うすくらいところでした。そこは、幾分川幅いくぶんかわはばも広く、水の流れもゆるやかで、フナやハヤ、ウナギなどがたくさん集まってきてよく釣つれたのでした。

村人たちは、この水の恵めぐみにいつも感謝かんしゃして暮くらしていました。

ところが、村人たちはいつしか、釣つった魚の多さを競きそい合うようになり、自慢話じまんばなしをするようになっていったのです。そして、次第しだいに、水の恵めぐみに感謝かんしゃする心も忘わすれていきました。



村人 1 「お、い、釣りに行かねえか？」

村人 2 「おお、行くべえ」

村人 1 「この間はおめえに負けちまったからなあ。今日は負けねえぞ」

村人 2 「おらだつて、おめえには負けねえ」

そんなことを言い合いながら、ふたりは川へ向かっていきました。

この日も、次から次へと面白いおもしろように釣れました。

村人 1 「今日もたんと釣れたなあ」

村人 2 「だがよお。みんながこんなに釣っちまって、そのうち魚がいなく

なっちゃうんじゃないか？」

村人 1 「そんなことあるもんか」

村人 2 「いいや、あるかもしれねえぞ」

ある夜のことです。釣り好きずの留吉とめきちさんが夜釣りよづに出かけました。釣り糸を垂たれたとたん、さあ釣れるは、釣れるは、たちまち魚籠びくはいっぱいになりました。

留吉 「今日もたんと釣れたなあ。おつかあが喜ぶべ」

留吉 「おお、こんなに遅くなっちゃった。急いでけえんべ」

と腰を上げたそのとき、どこからともなく、

川のぬし 「置いてけり置いてけり」

という不気味な声が聞こえてきました。

留吉 「何だ。今の声は？」

留吉 「空耳かあ」

と気にもせず、急いで帰ろうと、一方の手に釣竿を持ち、一方の手に魚籠を持ったそのとき、またもや聞こえてきたのです。

川のぬし 「置いてけり置いてけり」

留吉さんが魚籠の中をのぞいてみると、なんと、あんなにいっぱい釣った魚が一匹もいなくなっていました。留吉さんはびっくり仰天。魚籠もさおもほうり投げて、真っ青になって家へ飛んで帰りました。

留吉 「おつかあ、おつかあ。大変だあ。大変だあ」



村人 3
村人 4
村人 3

「あれは、川のぬし様の仕業しわざにちげえねえ」
「そうだ、そうだ。川のぬし様の怒りいかにふれたんだ」
「おら達たちがあんなに魚を取っちまったからだ」

川のぬし

「置いてけゝ置いてけゝ」
の声に、皆みな、腰こしを抜ぬかさんばかりに逃にげ帰かえってくるのでした。

それから、誰たれが釣つりに行いっても、

母

「不思議ふしぎなことがあるもんだねえ」
と、留吉りゅうきちさんのお母ははさんは半信半疑はんしんはんぎです。

母

「何なにだつて」

留吉りゅうきちさん、「置いてけゝ置いてけゝ」の話をすると、

留吉

「一匹ひとひき残のこらずいなくなつちまった」

母

「釣つった魚いしがどうしたんだい？」

留吉

「釣つった魚いしが・・・」

母

「どうしたんだい？」





村人 4

「あんなに争あらしって魚を取ったのがいけなかったんだなあ」

村人 3

「ぬし様の怒いかりをしずめるにはどうしたらいいべ」

全員

「どうしたらいいべなあ・・・」

村人たちは、ようやく事ことの重大じゅうだいさに気がつきました。それまでの自分たちの過あやまちに気づいたのです。

それからは、争あらしって魚を釣ることもなくなり、必要な分だけを川のぬし様からいただくようになりました。

そして、村人たちはその後のちずつと水の恵めぐみに感謝かんしゃし、川のぬし様を大事に思う心を忘れることはありませんでした。

気がつくといつの間にか、

川のぬし

「置いてけり置いてけり」

の声も聞こえなくなっていました。

村人たちは、この場所をいつの頃ころからか「おいてけ堀ぼり」と呼ぶようになりました。

この「おいてけ堀」、もう昔の面影おもかげはありませんが、その場所は今も残っています。もしかしたら、川のぬし様が今も住んでいるかもしれませんね。